

日展ニュース

No. 186

<https://www.nitten.or.jp/> 令和6年2月26日発行

編集兼発行人 神戸峰男



特集 第10回日展





第10回日展 右から合田文化庁次長、宮田理事長、逢坂国立新美術館長によるテープカット

第十回日展を終えて

公益社団法人 日展

理事長 宮田 亮 平

明治以降、西欧諸国に並ぶべきとして経済、政治等が急速に発展し、そして芸術文化の担い手として作られたのが文展であり、その後帝展そして日展と継承され、本年一一六回を迎えました。

幾多の試練の中であつても全く途切れることのなきこの日展は、とりもなおさず諸先輩方々の築かれた素晴らしい功績の上に立って今日があり、特に美術においては、人生の中で「生きる喜び」「ときめき」を有することもできる、そこに意義があります。

第十回日展においては、多くの方々の感動に応えるべく、準備をいたしました。コロナ禍でできなかった皆様と交流する解説会など各種のイベントも再開いたしました。ご高覧いただきました皆様には御礼申し上げます。

東京での開催後は巡回展で全国を回っております。今後とも何卒ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第二〇二三年 第十回 日展受賞者一覧

特選

第一科《日本画》

いのち赫く夏
過ぎゆく夏
蓮
迎へびと
古梅香(飛鳥)
観
舟
天
蓮
夜の隙間
池田睦月
岡本徳子
小本曾登
川島めぐみ
久保嶺爾
鈴木一正
竹内昌二
福田季生
三上友子
三谷佳典

第四科《工芸美術》

水・土・命5
風に乘って
紆
円
深層の情景
宙
silhouette
大地のうた
上弦の月
KEEP OUT
石上久美子
石黒美男
井上英基
岩渕浩之
織田定男
加藤丈尋
上田伸也
谷口信夫
野村裕昭
平林芳子

第五科《書》

趙介詩
彪如詩
五樂天詩
白樂天詩
もみち
吉野川
李野詩
春の夕暮
討伐絶
驪歌愁絶
池永碧濤
石川青邱
大崎雨萩
尾崎司邑
河合鷹山
川上鳴石
時崎伍鳳
豊原陸子
筈井淳
古溝幽哇

大臣賞

内閣総理大臣賞 懷
内閣総理大臣賞 Snorzando
文部科学大臣賞 青春の詩「祈り」
文部科学大臣賞 宙
文部科学大臣賞 僧善住詩
西田眞人
西房浩二
嶋畑一貢
河野榮一
有岡郊崖

東京都知事賞

地球のドラマ
影
わ
月の器・想日
風華
古澤洋子
佐渡清
九後稔
武腰一憲
田頭一舟

日展会員賞

泣く雨
小さな冬景色
singling figure V
夏が征く
韋應物詩
川嶋文紀
浅見文
宮坂慎司
西片正
森嶋隆鳳

第三科《彫刻》

のどけからましⅡ
馳
まなざし
石母田ななみ
加藤真浩
窪信一朗

第二科《洋画》
悠然
謠
シヨートブレイク
ペラン
化石の海
time on the table
ロマネスク追憶
ザンスカールの祭り
木造船'23
内海洋江
大木基彰
越谷なつみ
鷺浦悦太郎
橋尚美
平野克己
福本弥生
松井茂樹
宮下陽子
吉田定

謹んで震災のお見舞いを申し上げます

このたびの令和6年能登半島地震により、犠牲になられた方には衷心よりお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆様方には心からお見舞い申し上げます。

皆様の安全と一日も早い復旧がなされますようお祈り申し上げます。

公益社団法人 日 展

座談会

「これからの日展を考える」

出席者

理事長 宮田 亮平

副理事長 事務局長 神戸 峰男

第一科 日本画 審査主任 村居 正之

第二科 洋画 審査主任 小灘 一紀

第三科 彫刻 審査主任 能島 征二

第四科 工芸美術 審査主任 三田村 有純

第五科 書画 審査主任 高木 聖雨

司会 福光 幽石
(日展ニュース委員)

令和5年11月17日(金)
於 国立新美術館 地下一階

審査室D



宮田 亮平

司会 司会を担当させていただく福光幽石と申します。どうぞよろしく願います。

最初に、座談会を始めるにあたって、本日に至るまでのことを含めて、宮田理事長、一言よろしくお願いいたします。

宮田理事長 先生方、鑑審査、陳列など本当にご苦労さまでした。昨日は授賞式があり、都倉長官もお越しいただいて、非常にありがたいお言葉を頂戴し、大変うれしく思っております。

今回のニュースが一体どのような、これから展開していくかということとは、すごく大きな問題ではないかという気がしております。いわゆる後語りではなく、先行した状態で、これを読んだことによって、次の日展に挑戦をしていこうという足がかりになるよう

になってくれたら、大変うれしかんという気がしております。

伝統と革新という言葉がありますので、両者を含めながら進めてくだされば、日展ニュースの大きな意味が出てくるのではないかと思います。

司会 ありがとうございます。続きまして、副理事長の神戸先生、事務局長というお立場から一言お願いいたします。

神戸事務局長 審査主任の皆さん、ご苦労さまでございました。

日展ニュースは、入選された方はもちろん、落選された方々にも配付されて、新たに次の挑戦に向けての糧になるもので、それをどうするかが課題だと思います。今日は忌憚のないお言葉を先生方からいただきまして、次の日展のありようにつなげていただけたらと思います。

司会 ありがとうございます。それでは、一科から順番に、各科の審査主任の先生方に鑑審査のあり方、来年以降、出品者に伝えておきたいことや、お気づきの点など、お話しいただければと思います。

まず、一科の村居先生、お願いいたします。

審査全般について

村居 日本画は、五年ほど前から、審査方法を相談しまして、ほぼ同じ形態でやっております。今年度は、三四三点、昨年よりも四点多く応募がありました。

十回展ということもあり、少し幅広く取りたいという審査員の意見があり、壁面も三面増やし、入選数が一〇点ほど多くなりました。審査を重ねて、一六五点の入選が確定しました。

特選は、候補作品を一室に並べ、



都倉文化庁長官来館

投票により一〇点が決まりました。このように、審査はできるだけ公平に、透明感のあることが大事だと思っています。

毎年、審査員が全員変わるといいうのが日展のよいところだと思っています。価値観が少し違った審査員が来年度は選ばれる。また次の年度は違った方、その幅の広さが日展日本画の良いところと思っています。

来年以降の出品者には、今、宮田先生もおっしゃられたように、日本画でも伝統的な作風、それと革新的な新しい試みも含めて、幅広い応募を期待したいと思っています。

司会 では、二科の小灘先生、よろしく願います。

小灘 初めての審査主任ということで、日頃、審査している時とは全然違いまして、いろいろなことを考えたり、思ったりしながら、審査主任の仕事をしていただきました。

洋画は、一四六三点が搬入されました、昨年より出品数が一〇〇点ぐらい減っておりますが、その千何点を短期間のうちに審査しますので、最初は挙手で決めてまいりました。

最初の審査で大体九〇〇点ぐら

いが入選候補となり、さらに良い作品を選ぶために、審査を重ねてまいりました。

十回展ということでもありますので、やや点数を昨年より増やしまして、五九〇点入選といたしました。そのうち新入選が五八点ありました。

全体的に技術的な完成度はありますが類型が多く、個性的な作品が少なかったのではないかなと思います。

個性は自我と民族の精神との葛藤の中で生まれるものだと思います。洋画の場合は、伝統的な技法は高いものがあると思いました。そこに自分というものとどうやって葛藤しながらつくり上げていくかという要素が、今後の課題として残されているように感じました。

作品としてはそんなに大きな優劣はなく、選外になった中にも良い作品と思われるものもありましたが、残念に思います。どうしても展示壁面に制限がありますので、このような形になりました。

特選は、例年のやり方で、三〇数点の候補が選出され、最終的には一〇点の作品を特選としました。

これは自分の考えですが、西洋画とはどんなものか、そこにある

日本人の洋画とはどんなものかというものを見ながら、自分も審査をしながら勉強させていただき、そういう観点で決めました。

審査するということは大変で、みんなの協力により、五九〇点に絞りました。

出品者に伝えたいことは、西洋的な伝統と日本の伝統的な文化を、しっかりと勉強して欲しい。特に安井曾太郎は、西洋画を一生懸命勉強し、それをこなして、後に日本的な伝統を入れてすばらしい洋画の作品をつくられました。また、坂本繁二郎は、ヨーロッパに留学し、日本的な要素を入れて幽玄というような作品をつくって行く、人間の成長過程がありますね。今の人とはちよつと違うものが……。現代の日展の作家は、そういう優れた日展の先人の作品を思い出して勉強する必要があるの



小灘 一紀



ではないかなと感じました。
それから、映像や写真を用いた作品描写が多いですね。それをどう考えるかというのが、今後の課題だと思っています。

司会 続きまして、三科、能島先生、よろしく願いいたします。

能島 日展一一六年、今理事長からお話があったように、いろいろな改革を重ねながら、今回は第一〇回、これは私には感慨無量なところがあります。私はこの第一回の前に、改革委員をやりまして、定款の変更から審査に関すること、外部の審査員を入れたり、

ビデオを撮ったり、監査員を設けたり、またガイドラインをつくったり、厳重な中で審査を行いました。第一回のその緊張感は大変なことがあったと思います。

ああいう大きな改革を行いますと、出品者が減ります。出品者が減ると、入場者が減る。そうすると、三年ぐらい大変な赤字でした。その頃、第一回から第四回まで私は副理事長をやりましたので、この大改革をいかに行動に移すか、奥田理事長のもと、大変な思いでやってまいりました。まずここで一〇年たつて、本当によかったなという感じがいたします。

その後、会場・会期の縮小があったり、コロナが三年続いて、やっとこれが終わって一〇回目を迎えました。そういうことを考えますと、この一〇年というのは、出品者、審査員、会員も大変なご苦労をしながら、日展の発展に皆さんが尽くしたと思っております。

彫刻というのは、特にコロナの時に非常に出品者が大変でした。なぜかというと、大学がリモートになって、各大学で仕事ができない、これが三年続いて、本当に出品者が減りました。やっと今年は例年より一〇点多く搬入がございましたが、彫刻というのは場所も



能島 征二

要るし指導者も必要です。

今回の十回展の搬入は、先ほど申し上げましたように、一〇点増え、私たち彫刻の審査員は大変喜びました。

日展の彫刻は、具象彫刻としての多様性があり、そして人体表現では、石膏、樹脂、木彫などのいろいろな素材・技法の作品が見られます。今回は特選に良い木彫作品があり、また九〇歳の会員で笛を吹いた木彫の群像を出品した人がいました。

今回、二一四点の陳列を行い、彫刻の後ろを見せる工夫を考え通路を斜めに設定するなど、非常に苦労しましたが良い展示の会場になったと思います。

また彫刻の審査というのは、立体です。十四・五点の作品を台に載せて並べ、一点ずつ審査を行います。審査員は、並べた後、一

点一点の全体を見、それから鑑審査を始めます。

審査員一九名が挙手により入選を決定しました。多種多様な表現が見られて、よい審査ができたと思います。

日展は全国規模の展覧会でございますので、いろいろな地区から作品が集まり、各地の方が特選を受賞しました。

審査員もそして外部の審査員も本当に真剣に選んだ結果、彫刻二一四点を展示する事ができました。

司会 続きまして、四科の三田村先生、お願いいたします。

三田村 今、能島先生がおっしゃったように、日展の審査員行動基準というガイドラインをみんなで確認することから始まり、審査員として作品に対して、一点一点、真摯に向き合う。そして自分の中でこれが日展の工芸美術の展覧会場に並べていいと思うものに手を挙げるということを繰り返しました。

今年の出品総数六〇五点、昨年から六千マイナスイナスで、平面が増えて、立体が若干減りました。入選に至るまでのことは、今回、外部審査員の佐藤道信先生が、日展の工芸美術の審査に携わって大変な衝撃を受けたというような文章を

書かれています。それは、審査会
場では一切話しをしない、作品だ
け見てくださいうこととで始め
ていますので、メモ帳も携帯電話
も持ち込まず席順も、毎回休憩の
度に札を引いて決めるということ
をしておりました。ビデオも回っ
ておりますし、監査員が来ておら
れますので、第十回展に恥じない
ような、公明・公正な審査を心が
けました。

作品の傾向として、非常に若々
しいというか、日展の工芸美術は
こういう方向性に向かつていくの
ではないかというような、可能性
のある作品が増えてきたように思
っております。

日展の工芸美術は、一一六年の
日展の歴史の中で、明治四〇年に
第一回文展が開かれた二〇年後、
昭和二年に、日本画、洋画、彫刻
の中に加わり、九六年の歴史を



三田村 有純

飾っています。長い歴史をさかの
ぼっていきますと、傾向として大
きく変わってきており、過渡期に
ある作品がたくさん集まったよう
に思います。作品として、可能性
があり、完成度よりも、何か違っ
た感性を含めた部分で輝くものを
持っているものがたくさん見られ
ました。

特選の審査は話し合いの後、最
終的に投票で決定しました。

時代と共に作品が変わりますの
で、審査の方法も内容も大きく変
化していくと思います。今回、外
部審査員を含めて一九人、よい形
でできたと思っております。

それから、審査をする事ととも
に大事な陳列にも十分な時間をか
けて行いました。

来年以降の出品者にお伝えした
ことは、ぜひ自分の持つてい
る、感性、そしてエネルギーを込
めた作品を発表していただきたい
ということです。

司会 続きまして、五科の高木
先生、お願いいたします。

高木 今、三田村先生がおっ
しゃったように、ガイドラインにつ
いては全て熟読をしていたいて、
メモ等は一切手にしないというこ
とを徹底してやってみました。
審査員の先生方には、よい作品

を見逃さないこと、これが一番重
要な審査員の資格だろうというこ
とで、それは強くお願いをしてま
いりました。

第十回日展の書の出品数は八八
二二点、昨年より二四六点の増加
でありました。これは我々もちょっ
とびっくりいたしました。

審査に関しては、八八二二点を
見るといのはなかなか大変で、
書は漢字、仮名、調和体、篆刻と
いう四分野があります。

この八八二二点を審査主任が主
導し、審査員全体の意見を聞きな
がら、審査を進行をしていきま
す。

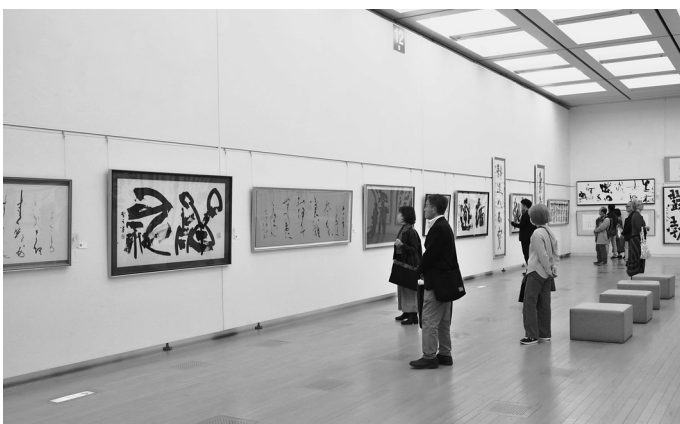
審査の結果は、入選が一一二
点で、入選率は一二・六%です。

現状では、入選数を多くするた
めに、いわゆる巻物は三メートル
五〇センチ書かれているところ、
陳列では五〇センチか六〇センチ
しか展示していない。苦心した結
果そういうスタイルになりました。
このように陳列を工夫しておりま
すが、もう少し入選率が上がれば
と思います。

書は、伝統主義というか、書聖、
書の神様と言われる人から代々名
を成した人の作品を一生懸命臨書
して、古典の香りのする作品を目
指すということが一番大きな問題

で、それに表現主義というものを
加味していかないと、年代性は出
てこないということで、これが入
選の基準といえますか、表現主義
がうまくミックスされたなという
作品が選ばれているのだろうと思
いました。ですから、そういう面
で、よい審査ができたのではない
かなと思います。

もう一つ、次に目指す人のため
にということですが、これは伝統
主義というか、伝統ある著名な作
家をしつかり習熟して、そのほか
に、表現主義、いわゆる個性です
ね。個性が出過ぎてはいけない。



書会場

勘違いをしてはいけない。派手にやればいいということではなく、やはり日展の品格というものを守っていただくような作品を出品していただければいいのではないかなと思います。

司会 宮田先生、これで五科の先生全員にお話をいただきましたが、先生お聞きになられて、一言感じること、あるいは何か思われたことがございましたら、お願いいたします。

宮田理事長 村居先生は、幅の広さという言葉をお使いになりま



受賞者と握手する宮田理事長
(授賞式にて)

したね。ちょうど本日会場を案内した時に、個性の広さというのをすぐ感じたので、とても先生の発言は心にしました。

小灘先生は、類型があるということと、洋画の特性というか、個性というあたりに対しても、とてもそれが表現されているなということを感じさせていただいたという点で、なるほどと感じました。

三科の能島先生のお言葉の中にもございますが、内面と外形の関係について語られ感動させていただきました。

三田村先生は、いわゆる公平であれど、座る席までも毎回変える。つまり、横にいる人は常に横にはいない。個々の審査の先生方の審美眼を大事にしていることが、とてもすばらしいことと感じがいたしました。

それから、高木先生、大変な数の応募数ですね。非常に圧巻の作品ばかりでございましたので、その中からの厳選は大変であったと思っただ次第です。

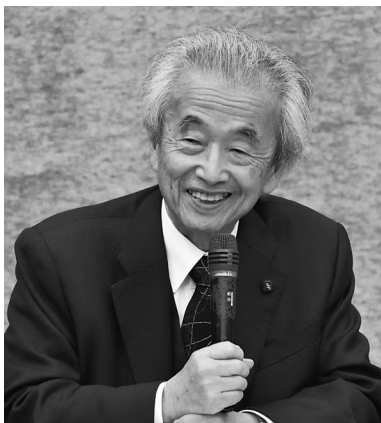
それから、今日感じたのは、制服の生徒さんが大変多く会場においてになっていた。あれを見てみると、心地よいものがございますね。未来を感じさせる雰囲気がある。作品を見ながらメモをとつ

ていたあたりが、非常に大きな未来性というものを感じさせていたのだというところでございます。

司会 続きまして、神戸先生、これで前半は終了になります。まとめとして一言お願いいたします。

神戸事務局長 理事長がおっしゃった感想の通りですが、各先生が本当に審査に工夫をし今回の十回展を成功裏に収めるために努力されたということを、今日ここで改めて感じました。

また、どの先生方も、未来に向けて、あるいはこれから日展を目指す方に向けて、ということを意識されていることに、感銘を受けました。このことに期待し、また安心してところでございます。ご苦勞さまでございました。



神戸 峰男

司会 これをもちまして、前半の部を終了させていただきます。

(休憩)

司会 時間になりましたので、後半を始めたいと思います。

最近、YouTubeに特別座談会として、「理事長と語ろう！、六人の中高中生」というものやその他にも「日展に挑戦！」ということ、若き彫刻家あるいは日本画家が思いを語るといふものもアップしています。すばらしい発信だと思えますが、このようなことも含め、今後のことを見据えて、これからの日展はどうあるべきか、各科の主任の先生方、一言ずつお考えをお聞かせいただきたいと思います。

最初に、宮田先生から、今日ご出席いただいている先生方に、こんなことはどうですかという提言をいただければうれしいのですが……。

宮田理事長 何はともあれ、日展が単に数字的なものではなくて、しっかりとした日本の文化を支えているのだという自負を持っているということに、揺るぎないものがあるということは、大変大事な

ことであって、それを誇りに思っていて、今日の審査主任の先生方にお越しいただいて、またニュース委員の人たちがいらつしやるというところに意味があると。

私の経験ではございますが、座長をしていたオリンピックのエンブレムを決める時、その審議をネットで公開しました。するとその後炎上が激減し、進行がスムーズに行なわれたのですね。

現在の日展の審査では、厳密にガイドラインのもとに行なっている。しかし、行っているということを知っているのは、これではだめなのだよ。それもオープンにしていくということによって、いかに日展に入選したということがブライドになるか。

五〇年前は、「日展に入選したら食っていける」と。これは私事ですが、入選した時にやっとかみさんの親父が、結婚を許してくれました。そういうことがあるのですが。

もしそれをそのまま今の人たちに当てはめた時にどうなるだろうかとというようなこともお考えになって、すばらしい日展の会員である、審査員にもなったという段階も含めて、それが非常に明快にわかるような捉え方というのをぜひ

このニュースの中で発信していつてくれたらという気がしますが、いかがでしょうか。

司会 それでは、一科の村居先生から一言ずつお願いいたします。

次の時代を担う 人たちに向けて

村居 前半で報告できなかったことが一件ありますので、ちょっと言わせていただきます。

特選、一〇点を選びましたが、その中で、後で事務処理をしている時にわかったのですが、初入選・初特選、二三歳の方がいらつしやいました。もう一つは、二度目の特選で、八三歳の方がいらつしやいました。その年の差は六〇年ありますが、会場に並べても何にも違和感がなかったと思っています。



村居 正之

ます。ですから、審査は本当に今年のいい作品を選ばせていただいたと自負しております。

そのことをご報告させていただきます。

次に、公募展を若い人がどう見ているかということですが、知り合いの学生たちに、どういう思いで日展に出品したかと聞いたところ、「自分の実力が現在のどの位置にあるのか知りたくて」ということでした。これにより、「より勉強していかなければならない」ということも感じたと思います。

基本的に、日展を自分の作家としての成長段階を測るための場と考え、方向性、価値の基準にしていると思います。

また、次の時代を担う人たちがどう育てるかということですが、普通の学校教育では、日本画を教えるなくなりました。

日展が子どもの鑑賞会や、ワークショップを行っておりますが、大変よいことだと思っています。実際に、材料に触れて、ああ、こういうものがあるのだということを知っていただきたいと思っています。「日本」という名の冠を持っている絵画を、もう少し広めたいと思っています。

日本画会場



司会 二科、小灘先生お願いします。

小灘 洋画の場合は、出品者が減っているということが気がかりですね。美術人口が減ってはいませんが、結構芸術をやりたい人は多いと思いますね。その辺のところを日展に引きつけるにはどうしたらいいかをずっと考えてきました。十九世紀までは宗教心とともに人間は生活してきました。ゴッホの時代になって、真の宗教心は薄れ、科学、法律が宗教に変わり神になりました。ゴッホは「絵画はミレーの時代で終わってしまった

た」と言っています。それでその後、悩みに悩んで、日本の浮世絵を見て、浮世絵の中で「日本人は自然と共存している。原始的な宗教心がそのまま残っていてすばらしい。」と手紙に記していて日本に憧れた。そういう画家だと思っています。

神を失った現代において、私は芸術がなければ現代というのは生きていけないと若い人に訴えています。それはなぜかというと、芸術だけが崇高な精神というものを描いたり、表現していくものだということを話しております。日展がもつと日展の魅力をアピールして、現代を背負っているという感じを出さないといけない。明治の頃の作家は一生懸命勉強して、洋画と日本の文化をどうやって結びつけようかという葛藤がありましたよね。洋画だから言えることかもしれないませんが、そんなことを感じております。

それから、AIの扱いについて日展としての方向付けを考える必要があります。新しいものがあるから出てきて、名画も複製できるくらいですから。ただ、現代人はき違えていると、若い人に言っているのですが、進化と進歩を同じにしまっているのです

ね。本当は、「進化」というのは魂を永遠に追い求めていく精神的、哲学的なもので、「進歩」というのは、ある面では物質的で、消滅しないと転換していかない。だから、日展はどちらをとるかという、進化を第一にして、進歩を従にして転換していくという考え方でないといけないと思います。とにかく見ていたら、うまく映像を使つてやっていますね。一見わかりにくいけれども、その辺、今後、日展の洋画の先生方も考えていかないといけないと思っております。

文明というのは、人間が崇高なものを求めてもがき苦しんでつくり上げてきたものだけが、価値ある魂となつて世に残っている。簡単なものではないと思いますが、そういう気持ちを燃焼して芸術に取り組むことをこれからの若い世代にもつと伝えられるような日展でありたいと願っています。

司会 では、三科、能島先生、よろしくお願いいたします。

能島 草創期より日展の彫刻は具象表現を求めて各作家がお互い刺激し合い、技術を磨き、多様な表現を重視しながら、より豊かな感性、造形性を求めてきました。そして、日展の絵画、彫刻という



彫刻会場

のはフラインアート、純粹美術と言われていますが、この純粹美術としての具象表現が日展の先輩から受け継いできた理念だと思っています。ただ、その表現方法はいろいろあるので、非常に難しいところがあります。審査所感にも書きましたが、伝統的な高い技術を重視しながら、大自然や人体から受けた感動を、類型的な物でなく、個性・魂の表現として表していく、それが日展の理念だと思っています。

今、現代美術や生成AI、人工知能の利用など、アートの多様化の表現が見られますが、やはり具

象表現を大事にし、これをしっかりと守っていきたいと思っています。

現代は特に大学で多様な表現を認め、具象表現がやや弱くなっているように感じますが、日展だけはそういうものをしっかりと守ろうという思いを私は持っております。

私が住んでいる地域では、様々な公募団体から会派を超えて幅広い作家を選び、「現代茨城作家展」を二十五年開催しています。私はほかの公募展も見えておりますが、日展の大事なおところは、きちっとした具象彫刻ができることで、フラインアートの絵画、彫刻としては、やはり具象表現を重視したいと思っています。

抽象絵画、抽象彫刻、日展の中にそういうものがあってもいいとは思いますが、現状では抽象作品の出品は少なく、深い具象の表現がされていると思いますので、これは大事にしたいという思いです。

司会 四科、三田村先生、お願いいたします。

三田村 工芸が九六年の歴史の中で、三〇年たった時に、用と美が結びついた人たちのグループが日展の工芸美術から出ていくのがちょうど昭和三〇年頃で、今から六〇年前に日展の工芸美術が現在

の運動体となりました。

私、初出品から今年で五一回目ですけれども、始めた時にはまだ少し前の状況というのが残っていました。先輩方の造形を見て、この運動に飛び込んだのですが、若い人たちを引きつける運動が日展の工芸美術の中から起きていったように思っております。

今も実はそれがきちんと続いていまして、今日も会場を見ていましたら、海外の方々が興味ある作品を撮影していました。

実は日展の工芸美術は、海外に行きますと、これは訳し方が非常に難しいジャンルになります。デ



工芸美術会場

コラティブアートになるのか、クラフトになるのか、決して用途性を求めているものだけではないということですよ。若い人たちにも、こういう新しい工芸運動、芸術運動にぜひ飛び込んできてほしいですね。

今、工芸という分野を中学校、高校で教えなくなっていますので、工芸とは何かということがわかりにくくて、工芸イコール、例えば漆器のお椀だよね、お箸だよねということになってしましますが、工芸美術はとても魅力ある分野で、日展の工芸美術はとても可能性のある事を若い人たちが捉える時代が来始めていると強く感じています。

今回の審査の中で、残念ながら入選しなかった作品で、色彩やモチーフの展開が、非常に若々しいものがありました。もちろん、僕らは年齢もわからないのですが、入選まで至らないけれども、そういうものに挑戦する人たちがたくさん見受けられたので、また次年度に期待をしていきたいと思っています。

それから、私は日展のよさは五科あるということで、ここに見に来ると、全ての日本の美術を理解することが出来る。今、能島先生

がおっしゃった具象を含めた美しさを伝承すること、それをどのようにに新しい表現に結びつけるかということが全てわかるので、若い人たちにもぜひ同世代のほかの科の人たちとお友達になってくださいと伝えていきます。それによって、日展というフィールドで育った人たちが、日本の工芸美術文化をきちんと推進していける人たちに育つと思っております。

司会 五科の高木先生、お願いいたします。

高木 先ほど申し上げられなかったのですが、書道の特選の選考について、話ささせていただきましたと思います。

特選は、本当に難関でありまして、八〇〇点に一点ということですが、最終的には一〇点を選びます。厳選された特選候補二〇点あまりから、審査員の先生が推薦の弁を述べて、投票によって決めさせていただきます。

八〇〇点以上の中から選ばれた一〇点は、入選作もすばらしいのですが、よりすばらしい日展の華となる作品が選ばれたのではないかなと思っています。

それから、二・三あるのですが、一つは、最近の若い人たちで、余り基礎が出来上がっていないと思

われる中、SNSなどで一〇〇人、二〇〇人のお弟子さんをすぐ集めたりして指導している。また作品制作におきましても、古典からかけ離れた観点で安易に個性さえ出せばいいやという作家が、若い人、特に二〇代には多いと感じております。この人たちが本場に正しい道を守って育っていくのかというと、心配ですね。ですから、その辺りのところを我々としてもケアしていって、よい方向にその人たちを導いていかないといけないのかなと思っています。

もう一つは、これはお叱りを受けるかもしれませんが、研究会の問題であります。ここで言うべきではないのかもしれませんが、いわゆる審査員は指導してはいけないとガイドラインにはあります。そのガイドラインを守れば、例え



高木 聖雨



いました。これは本当に僭越な発言だと思いますが、失礼いたしました。

司会 宮田先生、様々な意見が出てまいりましたが、先生の思っておられることをここでお聞かせいただけたらと思います。

宮田理事長 様々なものが出たのをまとめろというのは、とっても大混乱するわけですが、基本的に、ああ、先生方は本当に日展愛に満ち溢れているなというところをつくづく感じました。私が学生から教員までの約五〇年在籍した大学時代には、芸大愛という言葉が常に念仏のように言っていました。が、同じように日展愛というキーワードをぜひ持って、多くの方々、その一つの旗のもとに、ジャンヌ・ダルクが革命の時に旗とサーベルを持って前へ進んだように、これからもつと……。

例えば今、高木先生がおっしゃったようなことは、いろいろな改革という時には、必ず諸問題もあるから出てくるわけですね。でもそれは、どうすれば解決できるかというのを、この後、もう一つ考える必要もあるだろう。厳しくすれば厳しくするほど個性をなくすという反対な現象が出てきているというところも、日展が大きく伸

び切れない部分もあるのかなという気がするのですが、いろいろな弊害もあるかもしれません。今後の課題として残すべきことと、一つの大きな目標の下に進むという意識もあつてよろしいのではないかなという感じがいたしました。いかがでしょうか。そんな気がいたしました。

ぜひ事務局長にお話を。

神戸事務局長 お話を聞いて今日はいい会だったなあと本当に思いました。いろいろな発言をいただいて多岐にわたるとおっしゃいながら、皆さんが同じ方向を向いているなということ。今日は強く感じました。

私、若者たちと接する機会、多々あるわけですが、彼らは一様に、今の美術界のあり方について、疑問を感じています。高校から大学へ入り「表現とは」を学び、それからそれぞれの個性を重視する教育が行われています。

そこでは一様に結果を求め生き急がせているように見受けられます。

これらを踏まえ若者が求めている、あるいは美術を志向している方たちが求めている「もの」を、日展が吸収、注目していくところへ立ち戻っていけば、日展はすば

らしい受け皿になっていくであろうと思います。

特に伝統というものは、若者にとつて私は憧れだと思っています。高木先生が先ほどおっしゃった、臨書から始まって、それが後に表現へとさらに進んでいくという、これは決して書道だけの話でなくて、全ジャンルに通ずることであろうと思います。このところを我々が大事にして日展の持つよさを皆さんに知らせることができる、これをニュースとして発信して頂きたいと期待しております。

司会 これにて座談会を終了させていただきます。

長時間にわたりましてありがとうございます。



司会 福光 幽石

(おわり)

「瞬発力」と「遅さ」

(第一科日本画 外部審査員)

田中正之

西洋美術の研究を専門とする私が日本画の審査を担当することには、あるいは疑念を持たれた方もいるかもしれない。しかし、日本画や洋画といったジャンルがあるとしても、造形表現という点では大きな違いがあるわけではないであろうし、私自身は絵画表現として優れているか否か、興味深い作品であるか否か、を基準に審査をさせていた。

多数の作品を限られた時間で審査するのは想像以上に大変なことであった。「瞬発力」があるというか、見せられた瞬間に一気に迫ってくるような作品は、じっくりと細部を鑑賞してこそじわじわと感興をそそる「遅い」作品に比べて圧倒的に有利に思えた。だが、「瞬発力」と「遅さ」を兼ね備えた作品こそが結局は優れたものとして評価されるのだな、と審査を進めるうちに実感された。各賞を受賞された西田真人さん、古澤洋子さん、川嶋渉さん、そして特選となられた作家の方々の作品は、何よりもよくそれを物語っているだろう。いずれの作品も、こちらの眼をすぐに捉える力強さと、眼を離しがたくさせる味わいとに溢れている。

審査をしていてふと気になったのは、作品のタイトルの問題であった。正直に告白すると、絵

田中正之 (たなか まさゆき)



一九六三年東京生まれ。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了後、ニューヨーク大学美術研究所で学ぶ。専門は西洋近現代美術史。国立西洋美術館研究員、武蔵野美術大学造形学部准教授、教授を経て二〇二一年より国立西洋美術館長。二〇二三年七月、独立行政法人国立美術館理事に就任。

ただを見るときにはそれなりに関心を惹かれた作品で、タイトルを聞いた瞬間にがつくりとするものもあつた。絵画作品においては絵そのものが第一義であるのは当然だとしても、タイトルもまた表現の大切な一部であることを忘れてはならないだろう。作家が何を表現したいと思っているのかは、イメージとともにタイトルにも表れる。これから入選を目指す方々には、ぜひ気にかけていただきたい点である。

この頃の作品には『物語』がないからつまらない

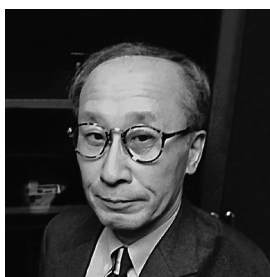
(第二科洋画 外部審査員) 篠雅廣

外部審査員のふたつの務めは、「日展審査行動基準」が正しく運用されているかを見極め、もうひとつは具象を伝統とする日展第二科洋画への出品作から「新傾向」と思われるものを積極的に評価するところにある。両者はともに情状酌量や忖度と離れて審査が機能するために不可欠であるが、今回も問題なく終始したことをまずは報せておきたい。

印象的であつたのは、審査後の雑談で、ある審査員が何度かつぶやかれた言葉であつた。「この頃の作品には『物語』がないからつまらない」。これは神話や歴史を主題とした作品が少ないという意味ではなく、文学で言う「ストーリー」と「ナラティブ」の違いと通底しているように思われた。つまり神話や歴史、そして自然と人間、静物など選んだ主題を描き切れば良いということではなく、むしろ絵画の表面上で可能な限り主題自身に語らせる態度を目指す、画家としての技量と彩管はそのためにあるのかもしれない。

そうだとすれば入選落選、受賞作品を問わず気になったことがいくつかある。同じ光線が射しても銅と真鍮では輝きかたが違う(ホワイトの置き方が一様では?)、生花の花弁はひとつひとつ影の濃淡が異なるはず(ただの「塊」ではない)、人物がどうしてこのように平板に見えるのか(写真を眺めている時間が長い?)、手先や爪先が画面から不用意

篠雅廣 (しの まさひろ)



にはみ出す(構図への無関心?) などなど。具象と写実を本義とするなら、描くべき対象へのいっそうの観察が必要なのだろう。また抽象的傾向をもつと評価すべきだという意見もあったが、すでに半具象(半抽象)の作品群が相当の比率になっているようで、これは自然の流れに任せれば良い気もする。

学芸課長、高知県立美術館館長、大阪府立美術館館長を経て、現在大阪市立美術館館長。専門は日本近代美術史。

「人間の砦 日展彫刻部門審査を終えて」

(第三科彫刻 外部審査員) 齊 藤 泰 嘉

今年の日展彫刻部門では、搬入された九五点が審査を受け、その内、六八点が入選となった。新入選は十七点を数え、新たな活力を多く迎え入れる形になった。私は武田厚氏とともに外部審査の任にあたった。外部審査員は内部審査員と力を合わせ、最後まで公正公平な審査を心がけた。途中で厳しい意見交換もあり、最終的に選ばれるべき作品が選ばれた。

初めて入選された方々にはこれまでの「くじけない」という意志を持ち続けていただきたいし、惜しくも落選された方々には、おこがましい言い方だが、「ありがたい」という感謝の気持ちで結果を前向きに受け止め、さらに自分を磨ききつかけにしていきたい。

日展の彫刻は、歴史的に「人体像」の美しさや逞しさを借りて「人間の生命」を表すという課題に取り組んできた。今年もその課題を現代の視点から受け止めた作品が高く評価されたように思う。「人間の生命」は、我々の生存の基盤だが、時に理不尽な争いなど「悪意に基づく正義」から襲われることもある。その時に彫刻は何が出来るのだろうか。そうした目で今年の日展の彫刻を見てみると、「人間の生命」の側に立つ作品を作り続けることの意味がさらに明らかになる。

彫刻も含め、芸術とは、人間や自然の側に立とうとする表現行為である。「さよならだけが人生ならば また来る春は 何だろう」という寺山修司の詩がある。

齊藤泰嘉(さいとう やすよし)

今回の日展彫刻受賞作にはこうした静かな内省とその表現を「人間の砦」として造形化した作品があり、印象に残った。以前、宮田亮平氏に「日展を海外で開きませんか」と持ちかけたことがある。きつと宮田氏の心の中では「人間の砦」を世界に建てる準備が始まっていると思う。



一九五一年山口県生まれ。慶應義塾大学大学院博士課程中退。博士(芸術学)(筑波大学)
北海道立近代美術館、東京都美術館、東京大学芸術学

系、教授。現在、筑波大学名誉教授、常磐大学特任教授、佐藤慶太郎顕彰会代表。

審査体験記

(第四科工芸美術 外部審査員) 佐 藤 道 信

今回初めて外部審査員として岡部友子さんと参加させていただいた。まず驚いたのは、審査の公平と厳正を期した一連のプロセスが、予想をはるかに上回っていたことである。ビデオによる審査風景の撮影、審査中の会話・私語・独り言の禁止、筆記用具の持ち込み禁止。審査員の座席も休憩ごとにクジ引きで変わった。これほどストイックな審査は初めて経験した。それが四日間、そして三賞を決める一日。審査員の人々は、審査だけでなく展示、式典等の運営実務に、自身の作品制作もある。私たちでもかなりキツかったから、大丈夫なのだろうか、と少し心配になった。同時に、こうした作業を日展は毎年行っているのか、そして百年以上も続けてきたのかと、改めて積み重ねてきたノウハウと歴史の重さを実感した。私にとっても、近現代の柱であり続けた日展を今回内側から見られたことは、貴重な経験になった。

工芸のジャンルは金属、漆、陶磁、染織、革、ガラス、七宝、人形、木、竹、紙と多岐にわたり、制作拠点も全国に遍在する。バランスよく選出された審査員も、ジャンルや地域など背負うものが多いだろう。どのように審査するのかと思ったが、さてどうするかという場面では審査主任の的確な問いと審査員の合議で決められバランスや公平性への意識が強く共有されていた。また一同に展示された作品のレベルの高さは、技術の錬磨に長い時間を要する工芸の場合、若手作家には逆にハードルが高くなるようにも思われた。若い人材のとりこみにどの団体も苦慮する現在、三十代くらいまでの若手登龍部門のような小区画があっても面白い気がしたが、落差の大きい滝をのぼるのもまた日展なのかもしれない。

佐藤道信(さとう どうしん)



一九五六年秋田県生まれ。東北大学大学院修士課程修了。板橋区立美術館学芸員、東京国立文化財研究所研究員を経て、

東京藝術大学美術学部助教授、准教授。現在、東京藝術大学教授。
一九九九年サントリー学芸賞、倫理美術奨励賞。

第五科書の審査に参加して

(第五科書 外部審査員) 弓野隆之

今回、初めて審査に参加させていただいた。依頼を受けて、九日間連続という日程を知らされてまず驚いた。私がこれまで経験した公募展の審査は、みな一日で終了するものであったから、規模の違いが容易に想像できた。そして実際に打合せに伺って、総搬入数八、八二二点のなかから、入選作品を一、一二二点に絞らなければならないという、何とも厳しいものであることが判った。書の応募数は年々増加しており、来年度は九千に迫るのではないかと。その活況は喜ばしいことと違いなが、一方展覧会場に展示できる作品数は壁面長によって限られるため、入選率は自から下がり、今回は十二・六%であった。一千平米ほどある広い審査会場に、搬入された作品がずらりと並ぶ様は壮観といえる。年々道具や手法に改良を加えられているとの事で、手慣れた作業スタッフによって、作品が数点ずつ一列に並べられ、次々と可否を振り分けて点数を減らしていく。良い作品を見逃すまいと集中力を緩めることはできず、最初はそのペースに戸惑った。審査は一審、二審と回を重ねるごとに作品に甲乙がつけ難くなり、漢字部門は八審まで行つてようやく終了した。特選は全員の無記名投票によって選定された。

私が勤務する大阪市立美術館は、改修工事に入る前まで日展の大阪会場として展覧会を受入れ、全国巡回の作品と地元の入選作品を毎年拝見してきた。この度、審査にあたり全国からの作品を見て、その書風の幅の広さと層の厚さを改めて思い知らされ、大変勉強になった。入選した作品は、審査員全員が認める力作であり、特選や入賞作は、自ら拓いた境地が目を引く個性的なものが精選されたと感じている。



弓野隆之(ゆみの たかゆき)

一九六二年東京生まれ。
青山学院大学大学院文学研究科
史学専攻博士前期課程修了。
澄懷堂美術館学芸員を経て、現在、大阪市立美術館主任学芸員。

文化勲章受章者

井茂圭洞

日本芸術院会員・日展顧問・
京都教育大学名誉教授・日本書芸院最高顧問・
読売書法会最高顧問



昭和十一年
九月十六日兵
庫県生まれ。
昭和三十六年
第四回日展初
入選、同五十二年第九回日展特
選、同五十四年第十一回日展特
選、平成五年第二十五回日展会
員賞、同十三年第三十三回日展内閣
総理大臣賞、同十五年日本芸術院
賞、同二十四年日本芸術院会員、
同三十年文化功労者。

文化功労者

黒田賢一

日本芸術院会員・日展副理事長・
日本書芸院最高顧問・読売書法会最高顧問



昭和二十二年
一月二十七日
日兵庫県生まれ。
昭和四十四年改組第一
回日展初入選、同六十二年第十八
回日展特選、平成二年第三十二回
日展特選、同十五年第三十五回
日展会員賞、同二十一年第四十一回
日展内閣総理大臣賞、同二十三年
日本芸術院賞、令和元年日本芸術
院会員。

文化功労者

宮田亮平

日本芸術院会員・日展理事長・
国立工芸館顧問・東京藝術大学名誉教授・顧問
第二十二代文化庁長官・第九代東京藝術大学学長



昭和二十年
六月八日新潟
県佐渡生まれ。
昭和四十五年
第二回日展初
入選、同五十六年第十三回日展特
選、平成九年第二十九回日展特
選、同二十一年第四十一回日展内
閣総理大臣賞、同二十四年日本芸
術院賞、令和五年日本芸術院会員。

叙勲

令和五年十一月

旭日中綬章

尾崎 邑鵬(日展顧問)

藤森 兼明(日展顧問)

大臣賞受賞作品制作意図

東京都知事賞受賞作品制作意図

日展会員賞受賞作品制作意図

内閣総理大臣賞 第一科（日本画）

西田 真人「懐」



イギリス・インバネスで出会った吊り橋と教会の構成美が作画のきっかけです。そこに気ままに描いた抽象画を背景に混在させることで新鮮な表現ができないかと、この八年間試みています。この地と一緒に訪ねてくれた人は既に鬼籍に入り、十数年前の旅を懐かしんで描きました。

東京都知事賞 第一科（日本画）

古澤 洋子「地球のドラマ」



地球の歴史を表している地層、その縞模様的美しさに惹かれています。線と線の間には一つの時代があり湾曲した地層はその時代にどんな壮絶なドラマがあったのか、とても及ばない想像を膨らませながら、儚い命の人類の営みと共に地球のドラマを描きました。

日展会員賞 第一科（日本画）

川嶋 渉「泣く雨」



雨は人の心をうつします。降る雨が泣いている様に見えるというのは、きっと自分自身の問題なのでしょう。母を亡くして一年、慌ただしい日常の中で、しつかりと涙していないことに気が付き、「絵の中で一度大泣きしておこう。」と、画面に向かった作品です。

内閣総理大臣賞 第二科（洋画）

西房 浩二「Smorzando」



画題のスマルツァンドは、だんだんゆっくりになりながら音量を落とす、または消え行くようにという意味です。左から差し込む光が弱くなり、静かに暗くなっていく様を描きたかったのです。アトリエに入る光は午前中から夕方まで様々な色、強弱がありました。それら全て塗り込みたいと思いました。

東京都知事賞 第二科（洋画）

佐渡 一清「影」



人は、他者の承認の中で生きている。しかし、表に現れているものより影のほうに他者が見えているものがあるのかもしれない。自分を知るためには影を見る必要がある。人間の様々な精神性を三次元性、二次元性、そして和という感覚の組み合わせで描いてみました。

日展会員賞 第二科（洋画）

浅見 文紀「小さな冬景色」



長い時間を経て自然が造り出す、植物のダイナミックなフォルムには何か永遠をも感じます。決して芽吹く事の無い老木や枯れ葉にも魂が宿っているようで魅かれる物があります。積み重ねたダンボールは地層をイメージして描いてみました。

文部科学大臣賞

第三科（彫刻）

嶋畑 貢「青春の詩[祈り]」



化学の進歩と共に環境汚染問題であつたり温暖化による自然災害の多発、はたまた悲惨な戦争等、私達の生活は日々変化している。
この作品に人々の平和を願い、祈りを込める姿を表現してみた。
制作にあたっては、初めて使う素材の取り扱い方に苦労した。

文部科学大臣賞

第四科（工芸美術）

河野 榮一「宙船」



私の中の少年がいまも夜空を見上げています。現在の夜空はずいぶん明るくなってしまったが、私が私の中に見る夜空は、いまだ漆黒の空と満天の星空である。そして私はかつての少年が夜空の先に夢想した、宇宙へ漕ぎ出す船をゆつたりと形にする。それを私は宙船と呼んでいる。

文部科学大臣賞

第五科（書）

有岡 郊崖「僧善住詩」



筆を持つ自在な表現を可能とする特質性を生かすべく線の強弱、太細、造形面では文字の大小変化、筆速の緩急、墨の潤渾など様々な表現手法をもつて立体性に富む作品に仕上げたく試みた。特に清澄感ある線と余白の効果に配慮しながら書いてつもりです。

東京都知事賞

第三科（彫刻）

九後 稔「わ」



困難の多い殺伐とした時代。分断が深まる世界でつながる大切さを思っています。平和を願う女性像で手に月桂樹の冠を持たせたのですが、作品に込めた「わ」は平和の和でありつながら輪です。そんな願いを説明の過ぎることなく、どう表現すべきか最後まで悩みました。

東京都知事賞

第四科（工芸美術）

武腰 一憲「月の器・想日」



シルクロードに点在するオアシス都市を旅した時の印象を作品にしました。歴史的な建造物に興味がありましたが、そこに暮らす方々の何気ない佇まいに惹かれ、民族衣装がとてもし鮮やかで九谷焼の色合いと共通する部分が多々あり、悠久とした雰囲気を感じてもらえればと思い制作しました。

東京都知事賞

第五科（書）

田頭 一舟「風華」



これまでの固着観念を再三三考すること、この度の最大のテーマとして四月から半年、制作に当たりました。かな本来の墨美ある流動美、また遠近感ある線を心掛けた作品に評価を頂きました事は大変幸甚でございました。賞の重みに身を引き締め、より一層精進を重ねて参ります。

日展会員賞

第三科（彫刻）

宮坂 慎司「singing figureV」



人の存在について、できるだけ個人に依拠する性格を排した、純粹な彫刻的造形要素による表現を追究している。制作における苦労は時間が限られていること以外には無い。制作での全ての作業には意味があり、自身がそれを手で行うからこそ生じる表現を楽しみたい。

日展会員賞

第四科（工芸美術）

西片 正「夏が征く」



近作は「夏を謳歌する」をテーマに、童心にかえり果実と昆虫の形態の模索。一・五ミリ厚銅板を二枚合わせて構成。銀仕上げ後に酸化被膜着色。鋳や鑿、当て金、松脂を駆使しつつ、緩いキュービズム形態も試みました。

日展会員賞

第五科（書）

森嶋 隆鳳「韋應物詩」



今回の作品は、韋應物の絶句を横型式に展開を試みました。充実した線条と美しい余白を求めながら、運筆のリズム感を大切に文字の大小、潤滑の変化等による躍動感溢れる作品を目指しました。中々思い通りにはならず志半ばの作品になってしまいました。今後も精進して参ります。

第十回日展 新入選者寄稿 ―喜びと抱負―

(日本画) 川 島 めぐみ



大学から学び始めた日本画を、どれだけ描けるようになったか。自分自身と向き合うため、一年前の同じ時期に初めて日展への挑戦を考えました。しかし自分の中にある未熟さを受け入れることなく、焦燥感のままに描き続け、躓き、結果として出品すら出来ずに終わりました。間違いなくあの時の経験が無ければ今の私の日本画はありません。今回の作品は、その時に描いた一枚の対になる絵として描きました。

(日本画) 崔 由依子



私はいま、日々の反復の中で感じることや人の存在をテーマに制作をしています。今回日展への出品を決めました。はじめは緊張もあり思うように絵の全体感を作れず、とても悩みました。その後も周囲の方々に励まされながら新しい目、厳しい目で自分の絵に向き合い続けた事は良い経験になりました。これからも自分の心に素直に、描くものの本質に向き合いたいと思います。

(日本画) 和久田 尚 希



私が公募展を意識したのは大学二年の冬でした。最初は地元の市展に出品しましたが思うような結果が出ず、制作に迷っていました。そんな時に日展の赤いポスターが目に入りました。私の中での日展はレベルが高いものでした。しかし、挑戦という意味で出品を決意しましたが制作は厳しいものでした。そのため、入選の通知が来た時は手が震えるほどの喜びでした。この先も迷いながら日々精進していきたいと思っています。

(洋画) 朝 妻 由香里



初入選作品は、地元にある廃業した水石の店を描きました。静謐なたたずまいの中に温かみを感じたからです。人の出入りがあり、店が活気にあふれていた頃から今に至るまでの歴史を思い、どうしたらその空気感を表現できるか色々考え苦労しました。日展の会場に自分の作品が飾られる事は、本当に身の引き締まる思いです。ご指導いただいた先生方をはじめ、絵画制作に協力してくださった方々に深く感謝申し上げます。

(洋画) 首 藤 清 子



この度、念願の日展に初入選することができました。大きな喜びと共に、導き励まして下さった方々、家族への感謝の気持ちでいっぱいです。学生時代より絵を続け自己のオリジナル性を追求してきました。今回の色面による静物画は、四年目になりました。その間、迷うことも多々ありましたが、常に励ましのお言葉をいただき「自分の道を信じ、やり抜くことの大切さ」を今回の入選で教えていただいた自分の作品と対峙した時の感動を忘れず、今後更に精進して参りたいと思います。

(洋画) 吉 田 留 美



「ヨコハマ夜景」初出品で入選、思いがけない朗報に信じられない程の喜びに包まれました。思えば仕事をしながら夜、絵を描き疲れて家路を辿る時、慰めてくれた数々の光、その光に魅せられて横浜の夜景を思いきり表しました。これからは、より感性を磨き自分の感動が人に伝わるよう描きたいと思っています。励まし導いて下さる方々や家族に感謝し今後もより精進してまいります。



(彫刻) 原 田 七 穂

大学で彫刻に出会い、制作していく中で「いつか日展に挑戦してみたい」と思うようになりました。今回の作品は初めて制作した等身大の作品ですが、完成までの約半年の間何度も作っては壊しました。試行錯誤の中で自分なりの美しさを追求できたと思います。今後でも支えてくださる方々への感謝の気持ちを忘れず、より良い作品を作れるように精進してまいります。



(彫刻) 北 原 朋 佳

この度は日展に初入選することができ、大変嬉しく思います。また、お世話になった方々に心より感謝申し上げます。今回の入選に驕らず、ひとつひとつの作品に真摯に向き合い学び続ける姿勢で制作していきます。



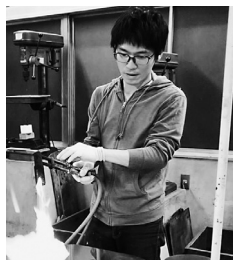
(彫刻) 宇 杉 昭 信

彫刻を始めて、十年位で、先生方及び知人の協力を得て、初めて日展に出品し入選することができました。今回の作品は三回等身大を制作しては壊して、二年目にして出来上がりしました。去年の出品は他の仕事の都合で諦めました。今回は作品の表現力をさらに高めるために、修正し、良い方向になるように仕上げましたが、満足度は七〇%位です。より満足できるように楽しく遊びの精神で次の作品作りに取り組みたいと思います。



(工芸美術) 田 中 麻衣子

学生の頃に染織と出会い、着物の染めに憧れて友禅染を学び、今日までの制作が続けてきました。自分が心を動かされたものを、自分なりの形や風合いで布に表現し、それを介して相手に何か受け取ってもらえるような作品を目指しています。しかし最近は挑戦する気持ちを失いかけていましたが、そんな折に今回の初入選が叶いました。何より日頃お世話になっている周りの方々に喜んで頂き、大変嬉しく思いました。これからも日々努力して参ります。



(工芸美術) 高 野 雄 生

第十回日展に初入選させていただきました。今回の作品では鍛金技法を用いて、生命エネルギーが溢れていく様子を表現しました。球体の上部に止まるクロアゲハは赤銅と銅を用いて制作し、煮色着色を行いました。今まで、鑑賞者として来場していた日展の会場に、出展者として作品を展示させていただいたことに喜びを感じております。今後も魅力ある作品を制作できるよう、精進して参ります。



(工芸美術) 酒 井 三和子

今回の作品は透明感のあるガラスに珪とカラーパウダーを焼き付け、初夏の空に咲き誇る西洋オダマキを表現しました。質感の違う二種類のガラス素材での制作にこだわりの、ガラスの美しさを最大限に活かした事が、今回の初入選に繋がったのだと嬉しく思います。この感動を忘れずに、今後も一層の努力を重ね作品制作に真摯に向き合っていきたいと思います。



(書) 酒井 刻石

日展会場を訪れるたびに、諸先生方の書に対する熱意と探求心に圧倒されておりました。それだけに今回の入選の喜びは何ものにもかえがたく、感謝の念に堪えません。

漢代の木簡隸書体を中心に古典の臨書を試み、線や表現を何とか作品に生かそうと悪戦苦闘する日々ですが、ご助言をいただき新たな課題を発見しながら書と向き合ってきました。これからも多様な書表現を追求して参りたいと思います。



(書) 太田 小百合

伝統ある憧れの日展。私にとって日展入選は最大の目標の一つでした。今年の日展の発表の日には忘れられない日となりました。初入选の喜びは日に日に増していくと同時にその重みを身に染みて感じています。

出品作品は一年間の集大成と思ひ、書いた作品ですが、まだまだ私にとっては課題点のたくさんある作品となりました。

これからも今の環境の中で、書の原点である古典・古筆の香りが漂う自分らしい作品を書いていくように、より一層精進してまいります。



(書) 新井 唯真

初入选作は、基本に忠実な作品を目標とし、白文四字で呉昌碩・河井荃廬を基盤に、小篆の流麗さを活かした章法、より勁さを求めた刀法を意識しました。

制作していく中で、今まで学んだ知識と精魂を注ぎ、作品と向き合って刻すことへの辛さ、楽しさ、身に染みました。

この日展の期間で、諸先生、先輩方の温情に触れ、初入选は嬉々たるものです。

これからも古典を尊重しつつ、現代に繋がる表現を模索した作品を展開していきたいです。



(書) 森 裕苑

この度の日展初入选、驚きながらも嬉しさを味わう瞬間となりました。また、自分にとって書について改めて向き合い、考える機会にもなりました。なかなか思うように行かないこともあります。今後、無心で紙面に向き合い、精進を重ね、課題に取り組んでいきたいと感じております。熱心にご指導いただいた先生方、共に学びを深める仲間、家族、多くの方々の支えに感謝しております。



(書) 藤 咲温偉

この度は、第十回という節目の折に伝統と格式のある日展におきまして、初入选の栄を賜り、大きな喜びを感じております。これもひとえにこれまでご指導くださった先生、諸先輩方のお陰と心より感謝いたしております。

今回の作品は、中国明清時代の行草書をベースに、力強い筆勢とシャープな筆致を心掛け制作に取り組みました。今後も古典を基に自己研鑽に励み、一層精進して参る所存でございます。



(書) 谷村 たみこ

この度の初入选は思いもかけないことで喜び以上に身の引き締まる思いでございます。熱心に温かくご指導いただいた先生方と、共に切磋琢磨できる書の仲間、恵まれた賜物と感謝の念でいっぱいです。

今回は万葉歌三首の仮名大字作品。全体の構成、墨の濃淡、何よりも仮名の美しい線をと努めました。が、思いとは程遠い作品です。これを機にさらに古典を学び「凜乎として雅のかな」を目指してまいります。

第10回日展イベントレポート

『講演会・シンポジウム・映像による作品解説等』

今回は、四年ぶりに特別対談を開催しました。デザイナーのコシノジュンコ氏と宮田理事長のセッションは、満席の来場者を魅了しました。

『わくわくワークショップ』

二十二年目を迎えた『わくわくワークショップ』。

会期中、日曜日の三日間、午前・午後の全六回で、定員を超える応募をいただきました。指導作家が子供達のために考えたプログラムを体験し、参加者は短時間ながら充実した時間を過ごせたようです。この様子はHPでご覧いただけます。

『手紙を書くこう！』

『わくわくワークショップ』の鑑賞カードから発展した、『手紙を書くこう！』では、四回目の今年も三五七通のお手紙をいただきました。昨年手紙のやり取りをした作家の作品を見るために来場し、その感想をポストに入れる参加者も年々増えています。若い鑑賞者と作家、作品を「手紙」がつかないでくれました。

※以下のイベントも再開いたしました。

『ミニ解説会』

『うくくく鑑賞会』

『触れる鑑賞プロジェクト』

第10回日展 入場者数（国立新美術館）

月 日	曜日	天 候	入場者数(人)	月 日	曜日	天 候	入場者数(人)	月 日	曜日	天 候	入場者数(人)
11/2	木	晴	3,348	11/11	土	曇	3,618	11/20	月	晴	4,650
11/3	金・祝	晴	7,304	11/12	日	雨のち曇	3,868	11/21	火		休館日
11/4	土	晴	3,587	11/13	月	曇のち晴	3,284	11/22	水	晴	4,828
11/5	日	曇のち晴	2,846	11/14	火		休館日	11/23	木・祝	晴	6,668
11/6	月	晴一時雨	2,162	11/15	水	曇	3,687	11/24	金	晴	4,093
11/7	火		休館日	11/16	木	晴	4,394	11/25	土	晴	5,324
11/8	水	晴	2,678	11/17	金	雨のち晴	2,704	11/26	日	雨のち曇	5,366
11/9	木	晴	2,849	11/18	土	晴	4,389	入場者数88,503名（平均4,023名） ※11/2は出陳者内覧会			
11/10	金	曇時々雨	2,217	11/19	日	晴	4,639				

第10回日展 応募点数及び陳列点数

（新入選数は入選数に含む）

	日 本 画	洋 画	彫 刻	工芸美術	書	合 計
応 募 点 数 (前年度比)	343 (+4)	1,463 (-112)	95 (+10)	605 (-6)	8,822 (+246)	11,328 (+142)
入 選 点 数 (新入選数)	165 (25)	590 (58)	68 (17)	434 (31)	1,112 (166)	2,369 (297)
無鑑査点数	132	122	146	118	145	663
陳 列 点 数	297	712	214	552	1,257	3,032

第 10 回 日 展 巡 回 展（予定）

会期は変更することがあります

開催地	会 期	会 場	開 催 者
東 京	令和5年11月3日～11月26日	国 立 新 美 術 館	公益社団法人 日 展
京 都	令和5年12月23日～ 令和6年1月20日	京 都 市 京 セ ラ 美 術 館	日展京都展実行委員会
名古屋	令和6年1月24日～2月12日	愛知県美術館ギャラリー	中 部 日 展 会
神 戸	2月17日～3月24日	神 戸 ゆ か り の 美 術 館 神 戸 フ ァ ッ シ ョ ン 美 術 館	神 戸 市 展 開 公益社団法人 日 展 神 戸 新 聞
金 沢	（中止）6月1日～6月23日	石 川 県 立 美 術 館	北 國 新 聞 社

※金沢展は令和6年能登半島地震の影響に鑑み中止とさせていただきます。

教えて、作家さん！
わくわくワークショップ
「手紙を書こう！」

温かい作品だと思いました。右側の子どもたちの眠そうな表情と温かいオレンジの色合いが柔らかくて、私も一緒に横になりたいと思っちゃいました。子どもたちの周りにある沢山の物はこれから見る夢や世界の広さなのか。果てのない宇宙のような青色でそれを感じました。温かくて柔らかくて果てしなく広がって深い、一つの画面以上の空気感を見られた気がします。とにかく私も一緒に寝たい。まどろみたい。とにかくまず色!! 先生の表現する色が好きです。私は日展を去年からみるようになったのですが、去年初めて訪れた時、迫力ある作品が沢山あって衝撃を受けたのを覚えています。その中でも先生の『制作の時間』は色味とコントラストが特に印象的で、今回「おやすみなさい」を見つけたときも、「あ! あれ去年の『制作の時間』の人だよ! 絶対!」と友人に報告しました。やっぱりそうでした。好。また来年も出品しますか。この手紙の企画は高校生までなので今年が最後になってしまう。しかし、先生の作品はきっと追っていきます。

凜々子さん 18歳

自分の作品をこんなにしっかりと鑑賞してくれている人がいるということを知ることができて、とても嬉しく思いました。私が描きたかったことやこだわった部分が全部書かれていて「すごい!!」と思わず声をあげてしまいました。来年も日展に出品するつもりですので、ぜひ観にきてくれたら嬉しいです。来年はさらに気合を入れて制作しよう! と思いました。改めて、この度はお手紙を書いてくださりありがとうございました!! こちらのお手紙を活力にして制作をまた頑張ろうと思います。

高山紀久恵



おやすみなさい



深層の情景

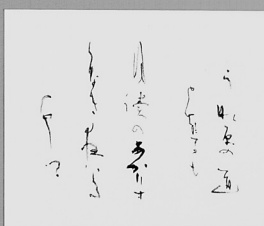
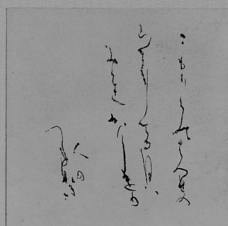
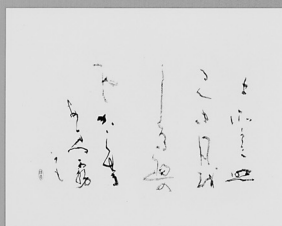
「わくわくワークショップ『手紙を書こう!』という、小・中・高校生から気に入った作品の感想や質問を集める企画を実施しました。4年目の今年も357通のお手紙をいただきました。

とてもやわらかな線で、暖かみがあって、他の先生方とは違う独特の表現技法を用いている所に感動しました。特に、潤濁の付け方が絶妙で、凄いなと思いました。質問なのですが、どのような筆、墨、紙を使用したのか。また、他の人とは違う自分にしか書けない書を書くには、今後どのように勉強していけば良いのか（漢字・仮名問わず）。また、日頃作品を書く時どのような心構えて作られているのかを知りたいです。先生の素晴らしい作品を見て大変勉強になりました。これからの時期更に寒くなると思いますが、健康に気を付けて頂きたいです。また、これからの作品も楽しみにしています。来年、先生の作品を観に日展に来ます！

虎也さん16歳

メッセージありがとうございました。米寿の年の嬉しいプレゼントです。筆・墨・紙は表現したい世界が描けるものをその都度選びます。今回日展で使った紙は、ややにじみ止めをした画仙紙で、美しいかすれを出すのに適した筆を選びました。書は線芸術ですので線質の良し悪しを第一としています。良い線を描くには技術が必要です。基本をしっかり身につけて、リズムカルに運筆しなければなりません。また、「間」の良さも必須です。すばらしい芸術を観たり聴いたりして学びます。これらの体験から個性が生まれ感性が磨かれます。いかに虚心で筆を運ぶか、難題です。

池田桂鳳



月

作品自体の色がグラデーションになっていて、とてもきれいでした。何枚か層になっているため、より複雑さが生まれているような気がしました。形がCの字みたいで、大きな波を表現しているようでした。中にある先のとがった細いものがぼくには、小さな船のように見えました。また、波打つように見える曲がったものがあるため、荒れた海を航海しているようでした。ぼくには、この作品が大冒険しているように感じました。何色ぐらいの漆を使いましたか？そして、どのような気持ちでこの作品を作ったのか知りたいです。

聡剛さん11歳

多くの作品の中から、私の漆芸作品「深層の情景」に興味を持ってくれてとても嬉しいです。海や山に見える風景、風や水の流れ、心の奥底にある記憶の情景を私なりに形にしてみました。観る人それぞれ違った記憶を持ち、感じ方が違うでしょうが、自分なりに想像をふくらませてくれた事に感動しました。そんな風に観てもらう事こそ本望だと思っています。作品のつくり方については、色漆を3色でグラデーションにしました。作品を制作することは根気のいる事ですが、とても楽しいです。今後も続けて日展に出品していきますので、是非観に来て下さい。

織田定男

●個人

青木晃子様 東 晋一郎様
新井演子様 飯田真未様
石崎國夫様 井谷善恵様
井上道守様 今田功一様
今村忠司様 岩田 薫様
内本久園様 奥田節子様
角井 博様 梶山純子様
兼重勇希様 菊池和久様
栗原直子様 呉 祐輔様
黒田浩平様 児玉安司様
小山信一様 坂本美賀子様
佐川かおる様 佐藤大悟様
澤井和行様 瀬川清楓様
高木寛史様 田頭明子様
田頭益美様 高橋千笑様
竹尾明子様 竹本葉子様
田中宏欣様 土屋礼央様
寺岡宏高様 中室里恵様
西田俊通様 西村潤焔様
西村友子様 野田裕一様
藤田理恵子様 藤本真之様
堀 稲子様 宮島幸男様
村里 暁様 森嶋順子様
吉見次郎様

●法人・団体

株式会社 IDホールディングス様
株式会社 大垣共立銀行様
株式会社 玉蘭堂様
謙慎書道会様
ゴールデン文具 株式会社様
株式会社 靖雅堂夏目美術店様
公益社団法人 創玄書道会様
株式会社 高山草月堂様
株式会社 千葉銀行様
株式会社 筑波銀行様
T&T パートナーズ法律事務所様
株式会社 帝国ホテル様
一般社団法人 東光会様
東洋額装 株式会社様
株式会社 西文明堂様
公益社団法人 日本書芸院様
ニューカラー写真印刷 株式会社様
株式会社 原汲古堂様
一般財団法人 ビオトピア財団様
福井素鳳堂様
有限会社 みなせ筆本舗様
一般財団法人 桃園学園様
株式会社 谷中田美術様
菱三印刷 株式会社様
株式会社 リンクス様
株式会社 和光様

表紙

右上 文部科学大臣賞
嶋畑 貢「青春の詩」祈り」
右中 文部科学大臣賞
有岡郊崖「僧善住詩」
右下 内閣総理大臣賞
西房浩二「Smorzando」
左上 文部科学大臣賞
河野榮一「宙船」
左下 内閣総理大臣賞
西田眞人「懐」

左の先生方が逝去されました。
謹んで哀悼の意を表します。



西本 瑛泉先生(工芸・書) 5.9.28
大樋 年朗先生(工芸・書) 5.10.17
(日本芸術院会員)

九十五歳。昭和二年
石川県生まれ。昭和
二十五年第六回日展
初入選。同四十三年日展会員、同
五十三年日展評議員、同六十年日
展理事、平成元年日展監事、同三
年日展理事、同五年日展参事、同
六年日展理事、同十一年日本芸術
院会員、同十二年日展常務理事、
同十六年文化功労者、同二十年日
展顧問、同二十三年文化勲章受
章。昭和四十二年第十回日展審査
員(以降合計十一回)。
野島耕之介先生(彫刻・会員) 5.11.28
松崎 良太先生(巨画・会員) 6.1.24

編集後記

秋が短くすぐに冬となりました
が、暖かな日が続き季節の移ろい
が変わってきた感じがいたします。

今号は理事長、副理事長(事務
局長)、各科の審査主任による「こ
れからの日展を考える」について
行われた座談会を中心に外部審査
員の先生方からの寄稿や大臣賞、
都知事賞、会員賞の制作意図や新
入選の方の喜びの寄稿などをお届
けいたします。

今回第十回日展は、新型コロナ
ウイルスが五類に移行し、行動の
自粛が三年振りに緩和されたなか
に始まりました。多くの美術ファン
の方が待ち焦がれていた日展に、
連日足を運んで下さり活気溢れる
会場となりました。

日展に挑戦してくださる方の目
標となり、次なる糧となる日展と
なることを祈念いたします。

(歳森)

編集委員 亀山 祐介 西田 眞人
浅見 文紀 前原 喜好
野原 昌代 堀内 秀雄
上原 利丸 村田 好謙
歳森 芳樹 福光 幽石